

特 116

115

志奴布子

白部
志奴布子
書



始





高 山 茂 樹 翁 肖 像

吉 田 初 三 郎 君 筆

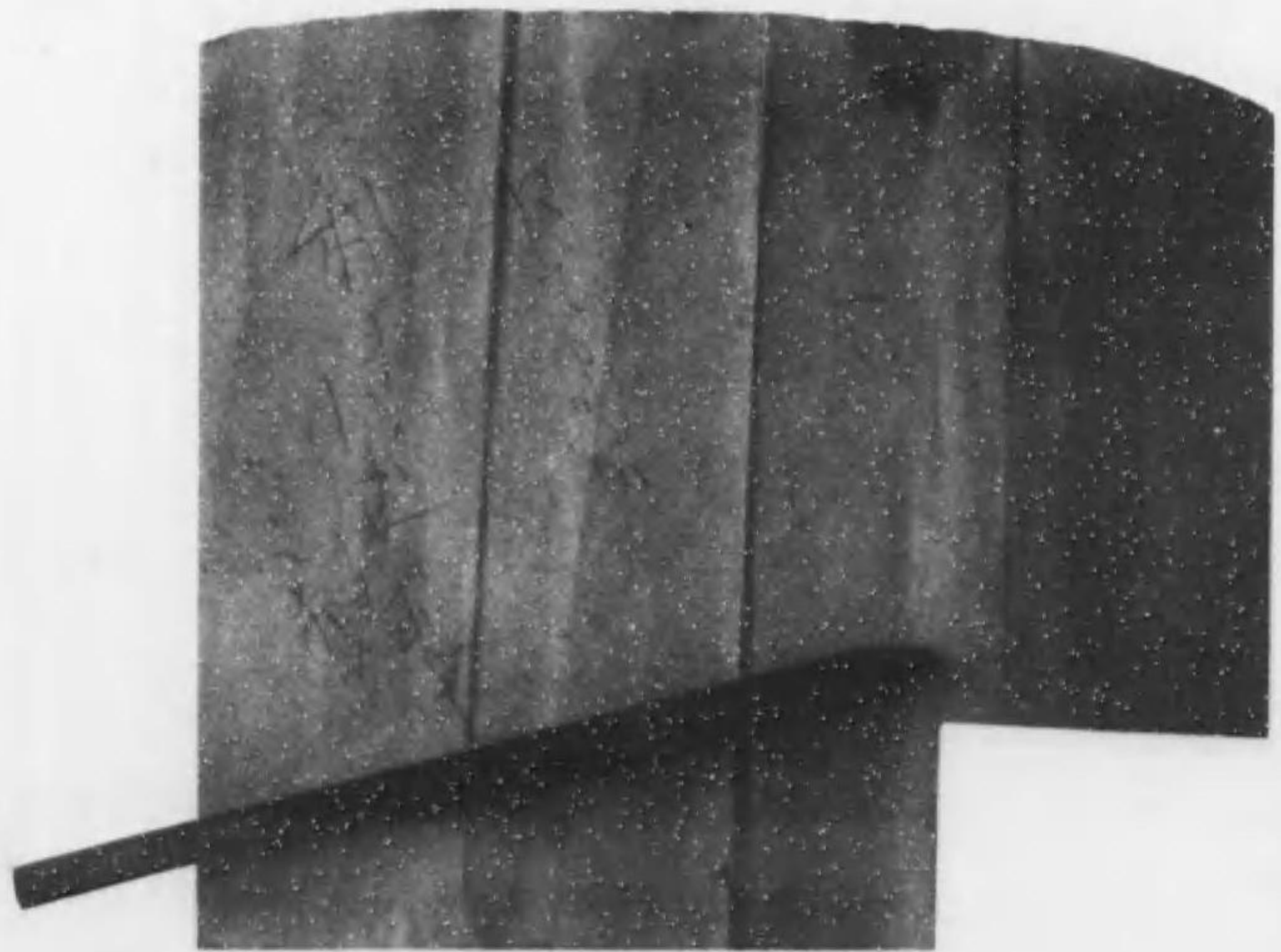
五十九の辰子に生れ、長門守高橋
茂樹の長子として、幼くして父を失ひ、
母の養ひに育ち、其の志は、
尤も、其の母の志に、
一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、
十一、
十二、
十三、
十四、
十五、
十六、
十七、
十八、
十九、
二十、
二十一、
二十二、
二十三、
二十四、
二十五、
二十六、
二十七、
二十八、
二十九、
三十、
三十一、
三十二、
三十三、
三十四、
三十五、
三十六、
三十七、
三十八、
三十九、
四十、
四十一、
四十二、
四十三、
四十四、
四十五、
四十六、
四十七、
四十八、
四十九、
五十、
五十一、
五十二、
五十三、
五十四、
五十五、
五十六、
五十七、
五十八、
五十九、
六十、
六十一、
六十二、
六十三、
六十四、
六十五、
六十六、
六十七、
六十八、
六十九、
七十、
七十一、
七十二、
七十三、
七十四、
七十五、
七十六、
七十七、
七十八、
七十九、
八十、
八十一、
八十二、
八十三、
八十四、
八十五、
八十六、
八十七、
八十八、
八十九、
九十、
九十一、
九十二、
九十三、
九十四、
九十五、
九十六、
九十七、
九十八、
九十九、
百、
百一、
百二、
百三、
百四、
百五、
百六、
百七、
百八、
百九、
百十、
百十一、
百十二、
百十三、
百十四、
百十五、
百十六、
百十七、
百十八、
百十九、
百二十、
百二十一、
百二十二、
百二十三、
百二十四、
百二十五、
百二十六、
百二十七、
百二十八、
百二十九、
百三十、
百三十一、
百三十二、
百三十三、
百三十四、
百三十五、
百三十六、
百三十七、
百三十八、
百三十九、
百四十、
百四十一、
百四十二、
百四十三、
百四十四、
百四十五、
百四十六、
百四十七、
百四十八、
百四十九、
百五十、
百五十一、
百五十二、
百五十三、
百五十四、
百五十五、
百五十六、
百五十七、
百五十八、
百五十九、
百六十、
百六十一、
百六十二、
百六十三、
百六十四、
百六十五、
百六十六、
百六十七、
百六十八、
百六十九、
百七十、
百七十一、
百七十二、
百七十三、
百七十四、
百七十五、
百七十六、
百七十七、
百七十八、
百七十九、
百八十、
百八十一、
百八十二、
百八十三、
百八十四、
百八十五、
百八十六、
百八十七、
百八十八、
百八十九、
百九十、
百九十一、
百九十二、
百九十三、
百九十四、
百九十五、
百九十六、
百九十七、
百九十八、
百九十九、
百十、

其 の 書 翰



大正八年二月末日福岡大學病院より
廣島中學卒業試験に歸り其の寄宿舎
の前にて採影せしもの

高 山 太 郎



其の絶筆
(一六頁參照)



はしがき

今年、父歿して満三十年、母は四十八年目、繼母は二十五年目、一人子太郎も歿後はや五年目となつた。そして私は父よりも生き延びたること一年で、六十三。妻和賀子も五十五となつた。かう數へ來ると、何だか心細く無いでもない。日夕、道の御爲に、で能くア今日まで齷齪明し暮したものだ。毎年一度づ歸省墓參を、と期しながら、缺けた年もあつた。かくしてまだ太郎の墓石も建て、ない。チ、今年、は建て、やらう。序に私等老夫婦のも、後で面倒のないやうに、一石にしてしまはうと、未然に、われらの氏名と生年月日とを彫刻させた。



そこで亡父の正忌日の十一月十六日を以て、親戚故舊と郷里に相會し、祖先の尊靈をも招ぎまつつて、御靈祭を執り行はうとするにつけて、來賓への引物に添へやうと、印刷したのが此の小冊子。固よりあだし人に見ゆべくもあらねど、子の親を偲び、親の子を思ふ切なる情の表現ぞと、もし見る人のあらんには、有難い仕合せである。

あ、まづこれで安心。宿昔唱道したる全國神職會も、漸く此程財團法人となつて、基礎が鞏固になつた。亡友に相逢ふ時にも申譯が出来た。今後は、年寄りの冷水も此の位にとゞめ、若い人達にやつて貰はう。さうして嗣子彌兵衛も、明春は神職養成部を出て、分家(亡父の姉を別家せしめられた近親)の末女を迎へ、累

代奉仕社に勤務することゝなる筈だし、第二弟大枝丸も、遅蒔ながら、昨年男子を擧げ、又この暮には、一人産まする筈である。

あゝ安心。大安心。と申して、ごうも碁に耽り、謠曲をうなり、御茶などをかき廻して斗りは、居られない性分だから、これから一つ更生の氣持——生れかはつて、若返つて、専心一意、わが命ぜられたる神社の事に餘命を捧げやう。これ丈のことが出来るかしらん。やり得る丈、ウントやつてみやう。

大正十五年十一月々始祭後

京都稻荷山麓にて 高山 昇しるす

尙々、本文なる亡父の傳記、やゝ自讃の氣味あれど、改作の暇が

無い。太郎の雜記は丁喪籠居中、反故の中から見出でたるもの。子の爲には、親をさなく爲りぬらんと、笑はしめく。亡父の詩歌なごこそと思つたが、まだその暇を得ない。

高山茂樹翁之傳

高山茂樹翁、幼名造酒、通稱薩摩、字を儉、雅號を槻園、また秋嶺と稱す。上野國吾妻郡原町の人、眞焉君の長子なり。天保六年正月二十五日を以て生れ、明治二十九年十一月十六日、胃腸を病みて歿せらる。時に年六十有二。翁八歳にして父を失ひ、十三歳にして祖父に別る。家代々、同町大宮巖鼓神社の神職たりしを以て、幼にして父祖の跡を繼ぎ、慈母安藝刀自に従ひて、具に艱酸辛苦を嘗め、終に玲瓏玉の如き天性を發揮して、隣里郷黨に敬慕せられ、歿後尙、神の如くに尊信せられぬ。其の學は、祖父眞淹君、本居太平翁の門に遊び、世に吾妻本居の稱ありし人なりしかば、早く膝下に在りて、國學を修め、漸く長じて、木村卓堂先生に學ばれき。卓堂先生は、何處の人なるを知らず。或はいふ、語薩音を帶びきと。蓋し深く世を忍ぶの人なりしなり。先生博覽強記にして、學、和漢梵に涉り、又武術を能くし、早く蘭學の一端をも修められたることは、其の雜記帳にて知らる。故に識見卓犖、遠く群儒を抜けり。傳

説すらく、先生は元大鹽平八郎の與黨なりしが、遁れて此地に來り、仔細に風土人情を視察して、思へらく、噫われ死所を得たりと。後同町の一場氏より娶り、帷を垂れて、遠近の子弟を集め、専ら文武の道を講じ、而も常に空理空論を排して、實學を授けられたりと。翁、幼にして家職を襲ぎ、已に世故に圓熟せるを、此の先生によりて薰陶せられしかば、翁常に云へらく、學問の要は、世道人心に裨益し、苟も人間を、善良なる方向に誘導啓發するものたらざるべからず、人の讀み難きを讀み、人の知らざるを知るが如きは、此れ迂儒の事のみ、一の字引のみ、學者の本領にあらざるなりと。されば其の説く所極めて卑近にして、里俗に解し易く、而も其のふ所、頗る熱誠にして、對者を信服せしめでは止まざりきと。翁また思へらく、平和は神の道なり。われ既に神職として、中臣の職(中取持の義)たり。神意のある所を宣示して、以て我が郷民を教養せざるべけんや。國家の大事に至つては、自らその人あり、我は村風子たらんのみと。町村の葛藤、夫婦兄弟間の不和等に至るまで、之を調停し、之を和合せしむるを以て、己の任務と爲し、風雨寒暑、いかなる深夜と雖も、人の訴ふるあれ

ば、厭ふ所なく、往いて其の堵に安んせしむるを以て己の任務とせられき。爲に晚年漸く健康を害し、疲勞の色見えしかば、子弟親友等、その青壯氣鋭の時の如くなるべからざるを以て、諫むれども、聞かずして云はく、予は予が一身の爲に働くにあらず、實に神職たる天職を完うせんが爲なり。抑、我が職務たる、神人の間に立ちて、世の平和を維持し、人をして各、其の職に安んせしむるに在り。日夕の神拜、歲次の祭祀に至つては、これその體なり。人事に關與するは、これその用なり。故に我は、我が職務に仆れんのみ。卿等それ憂ふること勿れと。更に意に介する所なかりき。

翁が壯年の頃は、幕政漸く衰へて、民心日に荒み、土民賭博に耽るの弊風あり。翁や何に感じけん。一夜其の群に投じて、大に勝敗を争ひしが、終に大敗せり。事、親友新井慎齋君(内田湖南翁の傳あり)に聞ゆ。慎齋君大に驚きて、其の不可を諫むれば、翁笑つていはく、學兄、乞ふ意を勞する勿れ。事固より邪道に屬すと雖も、神職たるもの、亦其の真相を解せずんば、何を以てか之を排斥するを得んや。之を予が他日

の行動に徴せられよ。又當時、地芝居と稱する素人演劇流行す。翁又潜に其の群に投じて、一度下賤の奴僕に扮し、大に喝采を博せしことありきと云ふ。其の小節に關せず、社會の實相に接觸して、諸事徹底的ならんとする事の親切なる、實に驚くに堪へたり。此の時、國學の眞髓たる、天皇至上主義は、發して討幕となり、攘夷となり、終に皇政維新、明治の大御代と改まりて、事々物々、改新の機運に向ひ、文明開化の四字は、燎原の火勢を以て、天下を席卷せんとす。翁思へらく、我が建國の體、當に如此ならざるべからずと雖も、やゝもすれば其の軌道を逸脱せんとするの觀あるは、これ時勢のみ、國體の根底に觸れざる限りは、大化の革新を、今日に再びするものと見て、國民自身も亦大に覺悟する所なからざるべからずと。是より専ら意を風教の刷新に致し、地方の風紀、頓に革まるに至れり。今其の一例をあげんか、翁や、斷髮廢刀の令を尊重し、率先して其の優麗なる總髮を斷ち、以て範を郷民に垂れ、又雙刀は、深く之を庫裡に藏して、木扇に易ふ。又卓堂先生の歿後は、家塾を開きて、子弟を教養せしが、斷然之を閉鎖して、同志と相謀り、他の郡村に先んじて、新に小學校を

創立し、原街第三番小學校と云ふ。これ實に、上毛に於ける、小學創立の、三番目たりしなり。

如上の明治の大改革は、世襲の神職を廢するに至りしが、明治六年三月、翁は直に累代奉仕の村社大宮巖鼓神社祠掌を命せられ、教導職を兼ねしめらる。翌七年十月には、草津温泉地なる、郷社白根神社の祠官に進められ、累代奉仕神社は兼務となる。又、川戸、金井、岩井、植栗、小泉、泉澤、新卷、奥田、五丁田、箱島、岡崎、新田、四萬、澤渡、山田、折田等、十數箇村の村社祠掌をも兼務せらる。而して維新の改革と同時に再興せられたる神祇官が、神祇省と爲り、神祇省が、更に教部省となりて、大教院の設立を見るや、翁は、熊谷中教院詰を命せらる。大教院、一變して神道事務局となるや、群馬分局の副長となり、後分局長と爲る。尋で神道界は、維新隆盛期の反動として、終に教部省も廢せられ、神祇の事、内務省の一社寺局の管掌する所となり、皇典講究所、東京に創立せられ、政教分離して、祭政一致の根本義、確立せられんとするや、翁は、また群馬縣皇典講究分所の受持委員に擧げられ、後その理事兼教授たりしが、終に分所長を命せ

らるゝに至る。かくて神祇道の事、歐化風の吹き荒ぶまに、陵夷して、又救ふべからざるに至らんとするの憾ありしかば、全國神職中、慷慨の士競ひ起りて、神祇官復興の議を提起し、其の惟一機關として、神職取締所(後に神職會)設立せらるゝや、翁また擧げられて、群馬縣の副たり、長たり。かくして、翁は、常に本縣に於ける重鎮として、斯界の樞機を總攬するの立場に立たれたりき。

翁が卓堂先生の同門にて、刎頸の友たりし新井善教君(大審院退職判事にて、明治維新の際、岩鼻縣解部トキベに出仕し、裁判官のあらゆる階級を経歴せし人)嘗て翁の他に出で、その技量を伸べ、大に飛躍せんことを勸説せしが、翁いはく、我に累代の聖職あり、大神の冥助と、父祖の餘徳とに依りて、能く今日あるを得たり。況や情義掬すべく、慈愛離るゝに忍びざる氏子信徒のあるあり、以て教ふべく、以て導くべし。これ我が天職なり、他は敢て辭すと。終に家郷を出づるを肯せざりきといふ。而して其の講究せし所、主として國學に在りしを以て、維新の際、神祇道の勃興に乗じ、先輩小坂橋好里君等と相謀り、川向(ひ)利根の源流、吾妻川の東南村落十數箇村の村民を

説き、一圓神葬祭と爲らしめたり。此れ蓋し祖父眞淹君の遺志を繼承せしものなり。そも、眞淹君在世の頃は、徳川幕府の政策として、神職たりと雖も、尙佛徒の手によりて葬儀を行はれ、所謂宗門帳下の民たらざるべからざる制度の下に置かれし時なれば、眞淹君いたく之を憤慨し、同町檀那寺密教山顯徳寺と離檀を相争ひ、訴願三年の久しきに及び、殆ど家産を傾倒して、終に能く寺社奉行の裁決を得て、高山家は、當主たる神主及び御子たる妻、並に其の嫡男を限り、自身葬祭たることの特許を得るに至れり。翁や此の家庭に養育せられ、深く神道の本義を尊信し、國體の尊嚴を發揚するを以て、己の任務とせられしかば、常に云へらく、我が國民たるものは、現人神たる天皇陛下の大御手振りに神習ふべきものなり。かくして萬億中、一も過誤あること無き筈なれども、若しこれを見出すことのあるにも、我が國民の本分は、夫にて足るものと覺悟すべし。總て我が國民は、天皇陛下に對し奉りては、絶體服従の義務あり。されば人生最終の儀禮の如き、我が國民たる者、宜しく我が天皇陛下の御趣けに率由し奉りて、神葬祭たらざるべからず。神葬祭は、我が國家

の儀式禮典なり、我が國家に對して、純忠至孝の人、必らずや神葬祭の家庭より出づべし。見よや、眞の敬神尊皇者は、皆神葬祭たるにあらずや。或は其の歿せし時、往古に在つては、必らずしも然らざる人ありきと雖も、其の歿後の今日に在つては、果して如何。所謂萬世に廟食して、上、陛下及び國家より、至大の尊敬を拂はれ、皇室國家の祭祀を受け給ふにあらずや。神道信奉の奥儀、實にこゝに在りと。世に處する、温謙そのもの、如き翁も、此の一義に至つては、斷々乎として讓歩せず、口角沫を飛ばし、談論風發、當るべからざるの概ありきと。尙其の神靈の有在を確認するの厚き、今將に瞑目せんとするに當りて、豫て遺言せし如く、笏形の小さな靈札に對して、自ら靈移しの儀を修し、醫師をして、驚嘆讚美せしめきと云ふ。又歿前三日、遺言數項中の一にいはいはく、予、今家に餘財なし、然れども予は敢て薄葬を希はず。これ虚禮を敢てするにあらざるなり。そも予、齋主として、人生最終の禮を介助せしもの、それ幾百人ぞ。而も其の多數は、彼の佛者の、貪慾飽くなき、終に人間の骨を質に取りて、香典の利息によりて、生活せんとするもの、比々皆然るを嫌惡し、唯、其の葬費を

減せんが爲に、神葬祭たるもの少なきにあらず。されば、我が郷、いまだ眞の神葬祭、模範的神葬祭と爲すべきものなかりしを以つて、常に遺憾と爲す。而して予は、呉々も虚禮を惡む、要はたゞ喪主に代りて齋主たらん人の、人格如何に在り。予が齋主たらん人は、それ誰ぞと。嗣子昇君、近親と相議して、終に一人を得たり。即ち國學者四大人の第一に數へらるゝ、贈從三位羽倉東丸大人の後裔羽倉光表氏、其の人なりき。昇君、急遽特使を東上せしめて、豫め同氏の承諾を得たりしかば、使者馳せ還りて之を翁に告ぐ、翁莞爾として首づきしが、爾來一言も發せず、刻々歸幽の時は迫りぬ。然るに翁突如として僅に問ひけらく、何時と。時に十一月十五日、夜將に十二時ならんとす。蓋し翁常にいへらく、予は決して物日モノヒ一日、十五日、二十八日等の神事日には死なじ。後世我が家のもの、正忌日の故を以て、祭事に差支を生ずべければなりと。終に翌十六日午前三時を以て瞑せられぬ。昇君を始め、近親門弟の諸氏、厚く遺命を奉じ、棺槨調度、總て正式に依據し、同地方空前の盛儀を以て、泣く／＼先塋の次に埋葬せられぬ。此日や、隣里郷黨、眞に父母を喪へる如く來り會し、

遠隔の知友先覺、また書を寄せ、賻を送りて、敬吊哀慕の誠意を表したりき。又翁が、かの神道各教派、先を争ひて獨立し、互に其の教信徒を争奪せし時に當つても、神道本局は、これ南朝正統の本山なり、勅定の御祭神、殿として神殿にましますと爲し、始終一貫、其の所屬を變更せざりしかば、神道本局、翁の訃を聞き、直に權大教正を贈り、後其の靈殿に、翁の神靈を鎮祀して、表彰する所ありたりと云ふ。又葬後、郷人相傳へていはく、凡そ新墓に至れば、常に寂寞悲愁を感ずるに、翁の墓前に詣づれば、却て饒々しく、慕はしく、樂しき心地すと、或は鳥居を建納し、或は石燈籠を献備し、詣者宛も神祠に於けるが如し。其の翁を敬慕するの深厚なる者に至つては、事ある毎に、墓前に告げ、疑ある時は、また墓前に額づきて、其の裁決を、暗黙の間に乞ふものあるに至る。翁の徳、崇高にして、威靈の深く、士民に感孚せるを見つべきなり。

翁は、別に嗜好なかりき。衣服の如き、綺羅を好まず。何にまれ、清淨にして、汚垢なきを以て、足れりとせり。飲食、また薦むるに任せて、嘗て好惡をいひしことなし。飲酒の如き、人其の量を問へば、予はゴウ酒なり。但し豪傑の豪にあらず、一合の合

のみと、諧謔一番せられき。翁また書に巧にして、和歌及俳句を能くす。若しそれ強てその嗜好を求めなば、それ或は圍碁なりしか。碁は初段に近く、上京の時など、奔走の餘暇、方圓社に出入するを唯一の樂みとせられしもの、如しと。

夫人黒崎氏、名は加津子、一女四男あり。長女富玖子、雅友富澤峨琴翁の男朔平君に嫁し、長男昇君は、夙に郷學を卒へて、東京皇典講究所に學び、國史國文の勃興期には、中等學校に教鞭を執りしが、後駿河の富士淺間大社、奥州鹽竈神社等の宮司を經、伊勢神宮の初代神部署長に拔んでられしが、皇典講究所、國學院大學、炎上の後を受け、其の復興に盡瘁し、拮据經營十有餘年、所長及院長たりし、佐々木、鍋島兩侯爵統率の下に、日夜奮勵努力して、兩所の既倒を、能く今日の隆盛に維持し、尙同時に、全國神職會を整理擴張して、常に其の牛耳を取り、神社の隆盛、斯道の興隆に、貢獻する所多大なり。後巖島神社宮司たること滿十一年、現に伏見稻荷大社の勅任宮司として、斯界の元老を以て稱せらる。次男幸磨君、上毛榛名山神社の一宮家を繼ぎしが、不幸にして病歿し、三男大枝丸君、米國に遊び、今や大阪に歸りて、實業界に飛躍し、四男

小枝丸君、樺太に於て醫術を開業し、又自治の村政に關與して共に令聞あり。翁の神靈、また以て安んせらるべきなり。

予や昇君と親善年久し。昇君、親友福本日南君に囑して、翁を傳せんとし、先づ侍史をして、稿を立てしめしも、果さずして日南君歿しぬ。予即ち更に見聞する所を附加して、他日翁の建碑資料に供せんとし、不文を顧みず、敢て此の稿を作すと云爾。

大正十四年秋九月

武州久下 菅谷誠一 良

昇いはく、大日本人名辭書中、亡父の傳記に、此の本文なる恩師卓堂先生の、學問該博なる記事の混入せる所あり(括弧を脱したる爲に)。訂正かた申入れたれど、これ亡父の苦痛おく能はざる所なるべきを信じ、茲に斷りおく。又いはく、表紙の藏書印は、卓堂先生、亡父の爲に、手刻せられたるもの數多ある内の一なり。又以て先生の多藝なりしを見つべし。

高山太郎の墓碑銘

大正十五年十一月建石

太郎は、昇の長男なり。明治三十四年二月五日、伊勢國宇治に生れ、小學を東京に、中學を廣島に卒へ、大正十一年一月三日の夕つ方、嚴島に病歿す。満二十一才。五月十六日、父母遺骨を携へ歸りて、先塋の側に埋葬せり。

心あひの吊慰者に答へける

のほる

我は男子をのこ泣してあり經れど

妹はたもとの乾くまぞなき

今はと見えける時の面影わすれがてに

母 和賀子

いまはとていでたつ死出の旅路とも

見えぬ笑まひのわが子かなしも

親子三人の墓



大正十五年十一月十六日太郡五祭に建之

かくして、前文を裏面に刻し、右側に昇左側に和賀子の生年月日と、出自を記し、餘白を存して、他日歿年月日彫刻の處とせり。又昇和賀子の四字は、朱を加へて生存を意味すること、世俗の習に習へり。

太郎の臨終と病中の事ども

天地に一人のわが子死にてけり

われはや老いぬ罪ゆるせ神

大正十一年一月三日の事であつた。元始祭奉仕後は、彌宜主典を始め、島内重立者の邸宅を廻禮して、祝酒にゑひどれ、いつ歸宅したかも知らぬが、殆ど例年の事であつたに、今日は、廣島邊よりの社參者、誰彼を相手に、午後も二時過となつた。何だか氣が進まないから、一應歸宅して、塔の岡なる宮司官舎の通用門——予が歸り來れる足音を、ハナレ(本館と勝手への通路一ツを隔てたる離家)を靜養所とせる太郎——予が足音を聞きなれて「どうサンお歸り」と呼ぶ聲、例の如し「オ、」と答へて、晝食を濟まし、巨健で年賀の來狀やら、新聞やら、見つゝありしに、和賀子の走り來りて、太郎がヘンの様子なればと云ふがまゝに、急ぎ往き見しに、こはいかに、ベットに起き直りたる彼の顔色たゞならず、汗、頭髪をうるほして顔面にしたゝる——こは

いかに、たつた今『とうサン御歸り』と叫びしものを、不安ながらに、彼の手を執り、苦しいかと問へば、彼莞爾として、予が顔を熟視すること平素の如きも、此の顔貌、今尙予が眼前に在り。母の死出の笑の歌もこゝなり答へなし。答ふること能はざりしなり。されど起直れるまゝ、彼指頭を以つて、夜具の上に、何か字かくものゝ如し。和賀子は、不安にかられながら、傍なる反故と鉛筆とを執つて與ふれば、彼先づ『新しいカミ』とかく。和賀子別室に入り、紙を求むる間に、下女や知らせけん。直ぐ隣家なる彼が平素の係醫、中丸軍醫かけ付来る。此の時、彼その反故に『小便出ルよ』とかく。和賀子ヨシ／＼と告ぐ。次に『ねてよいか』とかき、又『親』の字書きかけたりしに、鉛筆手より落つ。中丸軍醫、其の反故を取り、裏面に『悪い様です』と書き、竊に予に示し、靜に安臥せしめんと、和賀子相手に、枕も高く、そろ／＼と仰臥せしめしに……略血――しかも多量――心臓破裂――中丸軍醫いはく、折角多年の御丹精も、最早これまで……時に午後三時十五分……ア、／＼天地に一人の我が子死にてけり……今思へば、何か言はんとすれど、口己にいふ能はず。即ち新しき紙

を要求して、遺言ども書かんと思ひしにや。かくする間に昏迷……依つて「寢てよいか」と書き、利ザは何か不明なれど、小便の漏れさうなるを、心地あしく思ひ、なほも……親の字かきかけて、終に……絶命。さるにても、親の字の下の一字や何なりけん。今は知るに由なれど、歌集中の或歌など見れば、親不孝「または親切を謝す」などにもやと思はるゝは、親心よりか。

回顧すれば、今はむかし、大正六年六月廿二日夜、廣島一中寄宿舎にて、彼腹痛甚し、校醫の診断重し、學期試験むつかしと、自書の端書、いかにしてけん。遅れに遅れて、翌々廿四日の朝便にて飛來す。驚きつゝ、何故電話にては知らせざる、など云ひつゝ、和賀子をして、直に往きて視しむ。明日は、恐れながら、こも今はおはさぬ、先の李王殿下、御社参とありて、仙石子、伊藤公など來島、何くれと、歡迎の相談中なりしかば、予は往けず。夕方、和賀子より電話あり。縣立病院長吉村博士の診定を乞ひしに、正に盲腸炎、餘りに痛さこらへて……今や遅し。切開手術も不可能也。入院加療を要すれど、又いかにしても空室なしと。即ち予が親友、長屋樺太宮司(今は湊川)の

留守宅、寄宿舎の近所であれば、妻女等のなさけ深き助勢の下に、和賀子詰きりにて加療し、予もやがては、折々見舞へども、此の時また、千疊閣大修理費の寄附募集中、七月八日には、コンノート殿下の御社参など、公務多端なりしが爲に、思ひに任せず。彼また幾度か危険を告げしも、吉村博士は、知己の一人子といふに、固より誰かれの別はあらねど、最善を盡しくれ、和賀子も、看護婦相手に、晝夜の看病怠りなかりしかば、一時小康を得たりしも、終に餘病いろ／＼引き出で、終に右方の肋膜を犯されて、容易に治癒すべくもあらざりしこそ是非なけれ。七月廿七日、漸く病室あきたれば、縣立病院に入らしめしが、相變らず、一進一退をつゞけしも、十月廿三日には、漸く自ら筆とりて、本日入浴を許され、始めてベットに座す、奇骨石立、可憐、されどベットを手よりに、歩行練習中との報ありしは、うれしかりき。此の間も、和賀子は、大方在院看護す、「子を思ふ母の心のそはざらば、あはれ太郎は、とく死にてけん」と思はれたり。

發病以來、百四十一日目にして、十一月九日、とも角も退院、いまだ杖つきて、二三間位

の歩行やう／＼のことなりき。これより自宅療養五ヶ月にして、本復の色見えしかば、翌七年四月一日よりは、又寄宿舎に入りて、追試験の結果、五學年となれり。然るに翌八年一月十日、また肋膜あしとて歸宅したれば、折しも來訪の親友、葦津耕次郎君と相談の結果、十三日を以て、葦津宮司方へ、和賀子付添ひゆきて、福岡醫大の診察を受け、入院せしめしに、盲腸は殆ど治癒したれど、肋膜尙わろし、併、肋膜よりも、糖尿病あり。先づ之を治さざれば他は癒ゆること無し。尤も結核菌は未だ之を見出ですと。廿三日また和賀子を遣はせしに、今尙毎日検尿中なり。若し此の尿中或るバケモノ菌發見せられんか、到底むつかし云々、二月二十日、予親しく彼を見舞ひ、武谷博士について、聞き糺す所あり。博士いはく、今如何なる食物が今後本人の體質に對して、適當なるべきかを試験中なるが、なか／＼の大病人と知るべしと。

二十一日、葦津宮司と三人打連立ちて、東公園を散歩し、寫眞とる。二十三日、太郎廣島へ歸校す。第五學年、即ち中學卒業試験を受けんが爲なり。廣瀬校長の勧めにより、缺席がちなれど、受験の學力十分なればこの事。武谷博士も之を容認し、本人

は、どうでもよけれど、夫では、ともかく卒業しおかんかとの事なり。三月二日、試験を卒へて、駿島に歸宅し、翌三日、夜行にて、また福岡大學病院に歸る。七日卒業の通知あり。知らせやる。爾來三四ヶ月間、在院中の消息は彼が歌集によりて知らる。六月十六日、和賀子見舞より歸りて、太郎、米飯一椀づゝを食することを許さるゝやうになりたりとて喜ぶ。今迄は、嚴に米食を用ゐず、絶體の禁糖食なりしなり。七月十六日、幡掛氏醫師及葦津氏等の意見を傳へ來りていはく、在院加療前後七ヶ月、これ以上は、なか／＼手間どれて、容易の業にあらず。醫師も、一旦退院、ゆる／＼靜養を事とするに如かずといへりと。本人また歸宅を望む。即ち二十一日退院歸宅せしむ。爾來又一年有半、節食療養に努めしかば、やゝ小康を得たるものゝ如し。十年三月十七日、彼が希望を容れ、東京に遊ばしめしに、五月六日午前三時、また咯血す。醫師いはく、右肺甚だわろし。宮島の如き、空氣よき海岸に、悠々治療するに如かずと。翌朝直に歸島。九日吉村博士の診斷また然り。此の時、彼が親友に與へし書狀、彼の心機いかんを見つべし。載せて下に在り。彼發病以來四年

と八ヶ月。二十二歳を迎へし計りにて、初段の如く瞑目終に醒めずなりぬ。噫。右病中の経過など、餘りにこと／＼しき物しぶりなれど、親戚知友など、其の當時、いかなる病氣、いかなる経過にて、など問ひ越されたれど、筆とりて答へん勇氣もなく、さてありしに、今や五年祭といふに、今更のごと思ひ浮べられてなん。若し病める子持たらん人の、参考となることも有らば、徒事ならじかし。彼、中學在校中、雜書耽讀の弊あり。教科書は、落第せぬ限度にて、と稱する程なりしかば、今は都城の中學校長なる大谷徳馬君、廣中教員にて、舎監を兼ね、能く生徒の世話してくれられしが、彼の行狀については、數々注意し呉しも、終に改まらず。されば病中の彼……予も最早、何れは無き生命なればと、彼が思ひの儘に放任せしかば、家に在つては、日夜讀書に耽り、倦めば御山の山澤に逍遙して、自然と親しまんとし、或時は、天文學、音樂等に没頭し、或時は、植物學の研究に熱中して、其の採集したる標本も、尠からざりしが如し。予彼が心機一轉の動機ともなれかしと、英彦山に於ける川面凡兒氏の禊祓に参加せしめし、大正九年八月頃の如き、彼は寧ろ永遠に不平の

煙を吐く、あの阿蘇山の植物、それは實に我が親友なり」など、遊び廻つて、身そぎを他所にし、導師大宮兵馬君を困らせたりし由なるが、大宮君も、今や亡し。幽界にて今何をか相語らひつゝあらん。彼は、年ごろの世の青年の如くにはあらで、衣服、調度などは、其の興へらるゝ儘にて、何等介意する所なく、唯、書籍の購入には、惜げもなく、相當大金を投じぬ。東京丸善は、彼も得意の一人にして、歿後も、久しく新刊目錄を配布し來りしが、或年の暮などは、代金引換小包にて、外來の新刊書を取寄せ、母をして、其の支拂に、迷惑一番せしめしなど、今も語草の一となり居れり。彼また、生死の研究は、病氣がらとて、とくに爲し居りけん。九年の冬なりしか、彼自ら、長方形の箱形ベットを案出して、之を製作せしめ、下に炭火を容れて、暖をとり居りしが、一日母に向つて曰はく、これ兒が生前の住宅にして、死後の棺桶なり。兒瞑目せば、願くは、此のベットを引きくり返して、死屍を盛り給はれかしと。即ち遺言のまに、之を内棺として、裝飾を施し、對岸赤崎に送りて、火葬に附し、野阪彌宜の墓地を借りて、假埋葬に附したりき。予が宮司たりし御影もあらん。なか／＼の盛葬な

りしこそ、彼の却つて苦笑せし所にはあらざりしか。

終りに臨みて、一言つけ加へたし。そは本項初段の腰をれ……世の常ならんには「われはや老いぬあはれ世の中」など打出でんを、己つく／＼と思ひみるに、天地に唯一人の子、それを未だ人と爲さず、早く死なしたるは、洵に罪ふかきことにて、謝するに言葉なきなり。そは人生、子孫なかるべからず。こは神明の思召にして、神ながらの本義、生物學の原則なり。然るに哺育教養その法を過まり、又、唯、一子にして、之に次ぐべき實子なし。眞に神の御心に背きたるものといふべし。故に「哀れ世の中」など、敢て世を怨みず、神明に對し奉りて、切に宥恕あらんことを希ひ、其の罪滅しに、餘生をさゝげて、せめては二人分を働かんと覺悟し。早くもこゝに、五年を経にけるものなり。罪障消滅せざれば、予はそれいつ迄も生きんかな。生墓は既に建てたり。願くハ滅罪の後、歿年月日を刻し給へかし。之を予が家の子孫に對する遺言、偽らざる告白とす。(昇しるす)

太郎の雑記帳より

○春 雨

三月三十日 雨 (大正九年駿島静養中)

○人間の小さい争闘は毎日續いてゆく。

春の雨が悲しい。夜は更ける。

目を瞑つて、小さい人間から逃れ出で、神と語らう。神、自分はどんなものか、それを知らない。小さな人間すら知らないのだもの。自分の身體さへ、自由にならないのだもの。然し神……なんだかそんな様なものが、フレの筆を走らせてくれるのではないかしらん、今何かわからない。遠くにかすかな物音が聞える。その音は何かわからないが、然し自分の淋しい心を一層悲しくさせる。春の雨がかなしい。夜は更ける。

○自分は人生を知りたい。神を知りたい。總ての宇宙を知りたい。その胸の奥底の第一真理よりも、一つづゝのもの、總ての宇宙を知りたい。一つの石、それが包んでゐる神秘や。一匹のアメーバ、それが経験したロマンス。自分はそれが皆知りたい。

○三月もはやあと一日。唇を見る度に淋しくなる。悲しくなる。死の接近を豫知するからでもない。唯だそれのみが淋しいのだ。空しくすぎた過去が悲しいのでもない。唯それのみが悲しいのだ。未來、たとへそれが榮光でも、今の自分はずれしくない。萬一それが破壊でも、今の自分は悲しまない。過去、それが楽しい思ひ出でも、淋しい経験であつたにしても、今の自分には何でもない。たとへ現在の自分が悲しくて淋しいのだ。

○人間も人間であるより、神であるか、獣である時が美しい。人は永遠に神たるを得ない。見榮を氣にしたり、外聞を耻ぢたりする人間であつては。赤裸々だ。神と獸は反つて合一するかも知れない。人間は人間のものだが、獸物は自然の

ものだ。自然のものこそ神のものである。人間は人間である間は神にはなれない。

△「精進と勉強」之をヲレの標語としやう。世界は本能の表現でも、それを解脱したのが神であらうから。ヲレは自然の中に生きんよりも、それより上の神に生きたい。

△今日、病院時代の歌集「うきくも」をよんで、いやに悲しい気分になつた。春の雨は降る。夜は更ける。

△萬葉に憶良の歌として「をのこやも空しかるべき萬代にかたりつぐべき名を立てずして」と云ふのがあつた。此を読むとヲレはたまらない。淋しい、あゝ淋しい。

「萬代にかたりつぐべき名」願はないものはあるまい。オーハイネは

「名譽が人間の墓を暖める。そんなつまらない事は無い」と云うてゐたつけ。

だが彼は

「私の名は何ですか。ドイツで一番有名な詩人の名を云うてごらん。それが私の名前でせう」と云つたつけ。

△ヲレをなやますものは、エターナル、ライフだ。ごうしたらそれが得られるだらう。ヲレは子を生むことは出来ないのだ。優生學——ヲレは之を知つてゐる。「萬代に語りつがれて生きるか、神と合一し、神と共に生きるか……神と合し、神と共にある。嗚呼それは今日はじめて考へたのだが、ヲレは神を知ることが出来ない。まゝよ、たゞ煙だ。煙！たゞ煙だ。

十二時が打つた。ねやう。

春雨がふる。夜は更けた。つかれた。憩！

○潜龍俱樂部幹事諸兄（大正八年）

私は今貴兄等の演説をうけたまはり、讀さしの本の何ページかを讀み終へて、勞れ

た頭に、淋しい萬年筆を走らせて居るものでございます。

灰色の殿島！

私は、幾度か、元氣のない青年をもつてゐる殿島の町を、大きな聯想のうちに、そう形容して來たのでした。然し今日兄等を知り、灰色の空も、東の雲には、曉の鐘が鳴り響いて居るのを知つたのでした。その曉の鐘をつかれた兄等に對して、私は大きな尊敬をさゝげ、そして、又大きな共鳴の響をあげたいのです。

私と云ふ第一人稱、代名詞の本體を申し上げなければなりませんまい。私と云ふ人間は、兄等にとつては、ほとんど未知な人間であるかも知れませんが。私、名前は高山太郎、年は十九。現籍は群馬、そして伊勢で生れて、お江戸で生ち、十三の夏から、此所に奇留するやうになつた人間です。現籍の群馬は、夏の休に、二二度行つたかぐらゐのこと、生れた伊勢も、十三の春までそだてられた東京も、それ等はあまり大きな靈的印象をあたへては居ないので。青年期十三の夏から十九の現在まで、最も靈的影響の大きな青年期の前半を過した殿島、及び其の近くの廣島は、現在の

私、未來に於てもそうでしょうが——には最もなつかしい所の唯一なのです。

然しその「ナツカシイ殿島」は、同時に又大いに教へられた殿島であつたでせうか。

その住人等は、活動的だつたでせうか、進歩的だつたでせうか、否、否、前申し上げた灰色の町と、灰色の人間等だつたのです。それで無知な私の心は、この灰色の町と人等を改造しやうともせず、たゞこれと遠ざかり、心の中では、多少の批評はしても、之を外に表はさうともせず、それ等の灰色の空氣に染まぬ様、染まぬ様と、それ等を進んで、研究しやうともせず、それ等の人々と交らうともしなかつたのです。然し科學の研究を以つて、自分の一生の仕事としやうと定めた私が、今や、やうやく政治的になつて、灰色の町と人等を改造せんとして居た時、偶然——父の聽きに行けの言葉により——我が友を得たのを喜ぶのです。

拙い文と筆、頭も勞れました——早二時もだいたいぶ前にうつたことですから——とても書く元氣はありません。

何時か共にお話して、貴郎のお話などもうけたまはり、共に共に眠れる殿島の人等

を目覺させませう。高く大きく曉の鐘をついて、私の家は塔の岡です。近所でお聞になればわかるでせう。こちらから参るのが眞實でせうけれども、不用意な私は、兄等の御所は一つもしらないのですから……

十月二日午前二時半

封緘のまゝなるこんな手紙が、反故の中から出た。潜龍倶楽部と云ふのは、駿島の或一派の青年が組織した……青年期にはよく起りたがる政治思想團で、町政を批評し、國家の大をも論議するといふ、仲間の倶楽部であつた。一面にはどんな事を云ふかも知りたいし、一面には、彼が常に引籠つて、讀書三昧に、日夜を過すのが、どの途、長い命では無いが、親の情としてはよくない、身心保健上宜しくない、心氣一轉の方法ともなれかしと思つて、市内でピラを見たから、聞きに往くべく、勸告したことが有つたのを思出したことであるが、此の手紙で、彼が島内の同年配の人と、更に交遊する所なく、單身海岸を逍遙し、或は谿谷にわけ入り、自然を友として居たことが分つた。そして終に此の手紙も投函をせず、彼等と話し合う

たことも無かつたやうである。

○親友への消息

○血をはいたので飛んで歸つて來た。

(六日の午前三時)

六まくの再發と七まくだ。——靜かにねてゐると云ふので、靜かにねてゐる。熱は七度以下だ。

○早くお醫者になつてヲレを入院させてくれ。秋までにはよくなる心算だが、ヲレの心算は何時かはづれる。

○だが心も靜か、總てが美しく見えて來た。アルツイバセフの心理を解するには、アルツイバセフの病が入用だ。

ニイチエにあこがれる男は、彼の様な病氣が入用だ。

○いづれにしても、心の平靜なることが必要だ。あきらめもしなければ、しゆう着

もしない。有でもなければ、無でもない。生でもなければ、死でもない。病氣でもなければ、健康でも無い。

○新緑がたまらなくうれしい。ハナレで暮してゐるが、對岸のいろ、千疊閣のにはひ。ヲレは祝福されてゐる。

○何も云はない。元氣なことを云へば、病人のやせがまんとおもはれるし、淋しいことを云へば、病氣でへこたれたとおもはれる。

○だがヲレは自分を不幸だとはおもはない。よい空氣と、うまい魚。

○今度は何時會へるかしらん

太 郎

此の手紙は彼が心あひの友、在松山高等學校在學中の山本盛登に與へんとして投函せざりしものならん。大正十年の春、病もとより癒えたるにあらざれば、彼が突然にも、東京の國學院大學の入學試験に應じて見ん、と申出でたれば、それもよからん、併し正式の勉學はまだ早かるべければ、聽講生になりとも、自由のきく方にてと、分家の高山省吾が、本郷に住へるに托して、同大學に聽講生

たらしめしが、果然、再び咯血して、駿島に歸り、靜養中の手紙なるなり。而して此の親友山本も、大正十四年に物故して、今や亡し。幽冥にて、彼等二人は、今何事をか語り會ひ、何事をか爲しつゝあらん。非常の仲よしなりき。

○時局に對する感想

デモクラシーについて

高田博士のデモクラシー、ベースが問題となつた早稻田の事件後、早一ヶ年の月日は過ぎた。それ以來、殊に所謂デモクラシーが盛になり、毎日の新聞紙上、ほとんど此の語を見ない時が無いやうになり、或論者は、喜ぶべき傾向とし、又或評者は、世界の國家的生存を危くするものごさへ云うて居る。

併し自分は、此等共にあやまれり、と斷言するに憚らない。

そもく、デモクラシーなる意義にして、人類に對して、一様に等しい權力と、自由とを與へるといふものであつたら、此は實に容易ならざる問題である。

何となれば、無智な人間に、智ある人間と等しい権力と、自由とを與へたら、其の結果は如何。

歐米の學者の『立憲政治といふことにして、無智無能の人間に對して、等しく参政權をあたへると云ふことでは、其國を滅亡せしむるものである』と云ふたのを記憶して居る。これはともかく、手近な例で、自由平等を、字義通に實行した露國の現在と、將來とに思ひいたる者あれば、一目して、字義的な自由平等が、如何なる弊害を與へたのを了解することであらう。

然し一七八九年の佛蘭西革命以來、其モットとしたる自由と平等は、世界の風潮となり、十九世紀から、二十世紀にかけての此等の運動は、何程大きな者であつたらう。あの政教一致の最大權を有して居た、ロマノフのツァールさへ、國內に立憲政治を布くに至つたではないか。

かく、あやまれる民本主義は、排すべきではあるが、眞の民本主義は、世界の風潮として、漸次その勢力を張るべきである。

とはいへ、此れと全然反對の傾向が、全世界を流れてゐると云ふも、亦否定すべからざる事實である。

其の反對の傾向とは、政治——或は軍事等の——大權が、なるべく少數者の手に委ねられんとする傾向である。

歐洲の聯合軍が、初め大きな動作をしなかつたといふも、單獨には、全軍指揮の大權が、ヒンデンブルグ一人の手にあるに關はらず、聯合軍に於ては、各、獨立せる數國の指揮官の各の手に、この大權があつたといふ事に、多大な原因を有しては居らなかつたらうか。

又例をデモクラシーの本元、米國にとるも、參戰以來、デモクラシーの本尊、ウイルソンは、專制の君主(?)とまで評される程、獨斷的な行をしてゐるではないか。

かく政治に軍事に、デモクラシーが唱へられる半面、それと全反對な大權の、最大少數者への集中が行はれてゐるといふことは、矛盾の如く感せられるも、これ實に大きな眞理だと、デモクラシーの語を聞く度に、何時も考へさせられるのである。

○私の愛蔵してゐるもの 尋常小學六年時代の作文

僕はなにを愛蔵してゐるかしらん。

「本か」「おもちやか」

いくらかんがへてもない。ないはずはない。しかしないのだ。

そのかはり僕は愛蔵せらるゝ所の物であろう。それはたしかにそうだ、一人子の僕だもの、父母に愛蔵せらるゝ所のものである事はたしかである。

僕はなににも愛蔵してをらぬ。

しかしこれではこまるにちがいない、大きくなつて

「貴殿の御秘蔵物を拜見仕りたい」

等と云はれたらよわるであらう。

こうゆうときには、おとうさまの軸物か刀でもはいしやくするほかはない。そうだが、家には乃木大將の手紙があつた。之を出せば大丈夫。今から秘蔵するに及ば

ない。

おもひでをほき六月廿三日、あゝ、これぞ先帝最後の幸行なり、東京帝國大學卒業の式！

この時某新聞社、先の帝の御ぼう(御肖像か)をさつゑいしたてまつた寫眞！、これぞ我(以下不明)

余の愛ぞうせる物の中に——刀の中に名を小がらし丸と云ふ、之余明治卅四年二月五日我がたんじよ(誕生)と共に、皇大神宮おかげうちとて某氏よりはいりようつかまつた刀、これ余のまもりがたななり、今この刀世にあらはれすとも、今卅年後、余名をあげたる時、世界人士、皆きそひて之をゑんとすべし。

あゝ、この刀、上古にをける日本武尊之をもちたまひしか、中臣かまたり入鹿をちゆうするどき之をもちたりしか云々そのいづれなりしをしらねども思へばたつきこがらしまる、古人の——(以下不明)

こは、太郎が東京麻布小學尋常六年の時、國綴方草稿帳と題するものに、矢鱈と書

いつけたるものゝ内の一節なり。前後を参考すれば、大正元年の暮か、二年一二月頃の尋常六年、十二歳の時のにて、先生の筆も入らぬ草稿その儘のものなれば、固より文を爲さざれど、彼が一人子として、父母に愛せらるゝことを、自覺し居りたることの嬉しく、又予が、乃木大將殉死の後、大將の手紙を、今更のやうに、反故の中より見出で、珍藏したるものあることを知りて、そを愛藏せんとする心根——乃木大將を敬慕する心の見え、又明治天皇の最後の御肖像を、彼が居間の楣間高くかゝげ奉りて有りし心根——まだ舌の根よくもとほらざりし頃より、予口づから、一句づゝ、次々に、教育勅語を暗誦せしめしことの効果が、今此の草稿帳に鉛筆の影うすく、空しく見ゆるが嬉しくも、亦悲しくて、不覺にも、涙うかび出でしことを、心ある人々に、そと知らせまほしくてなん。

因に云ふ刀の事、小烏丸と御影打と、同じものゝやうに聞ゆるは、あらず。小烏丸と云ふは、元岩下方平氏のもてるを、故ありて、予が學兄河村常造氏の有となりしを、氏が、太郎の誕生を祝して、贈られたる其の太刀造なる小刀が、所謂菅蒲作り

て、宗重正伯より、先帝に奉りたりと云ふ小烏丸も、此の作なりと、日置兼次氏が來訪談の折ども、彼がやゝ物心つきて、予が膝下に在りて、聞き居りしを、おぼろげの記憶のまゝに、かくは書きしなるべし。又皇大神宮の御影打の小刀、こも其折どもにやありけん。日置氏は、神宮の神寶を鍛へたる、宮本包則氏の助手として、奉造に従事したる人なるが、此を太郎様に參らせんとて、贈られしを、一つ袋に納めて、折々の手入れの時ども、彼に語り聞かせしことのありしを、おぼろげにも、記憶し居りて、かくはものせしものなるべし。

○

夕六時夜のとばりの下るころ崇福寺なる鐘のなるなり（以下福岡病院にて）
日のめぐみ梅雨のあがりて松原のかげ面白くうつしいだしぬ
同室の男死にたる梅雨の日は雨はあがれどなかさびしき
我はたゞ一人楽しみ書よめば隣床の人は元氣なしといふ

三つ四つ五つ六つ鳴る鐘の音を淋しきまゝに我はかぞへぬ
 退院の人をおくりて歸るさはいふにいはいれぬ淋しみのあり
 病院の長き廊下の腰掛に憩ひてあれば暮の鐘なる
 白鳥のうぶ毛の如き糞まにのりタンボボの種子たね飛んで來りぬ
 淋し悲し心いらだち松原に一人出でみぬ常さやみのよる
 夏の夜の短きひまを寝ねがてに靜かに起きて月などを見し
 單調の一日は暮れぬ月やけの空にむかひて明日を祈りぬ
 讀み飽きて伏せておきたる翻譯の女主人ヒロインに似し女ゆめみし
 東の空にかゞやく一つ星愛の點花ぞいともかしこし
 夏の日の午ひるすぎのころ水盤の金魚は水面おもにあへぎ呼吸いきする
 生せいにもがく生きものあはれ水盤の金魚もだへぬ生のいとしさ
 にぎはひを戀ふる心と淋しみを慕ふこゝろと我ともにもつ
 父上の手紙に母はロク／＼も寝ぬなどゝあり涙ぐまるゝ

晝はひる夜はまたよる我はたゞ思ふともなく物おもふなり
 氣力なき何にたどへん病院のベッドの上にとゞ横たはる我
 今日やくる明日や來たると思ふ手紙かみ今日も來らず日は暮れにけり
 樂しげに音たてゝ來るスチームの今日は來らすいかにかはせし
 曇りたり雪も降りたり病院の松原すぎて葬式の行くも
 屍室をば通る時にはなにとなく物さびしきが誰もにやある
 長き森濱の松原こえゆけば運動場のポプラ枯れたり
 歌うたひ餅つく音に年の暮平和の氣分みなざれるかも (以下巖島靜養中)
 冬の日には内海の港風あれて白き波さび北風の吹く
 その昔平家の姫の納め經緯地にさびし金泥の文字
 古のあはれを語る秋の雨百八間の廻廊さびし
 白き壁赤き廊下も煙りけりむらさき色の秋の小雨に
 乳色の小霧さの中の軍艦よ長き旅をへ歸り來るか

秋の祭千燭光の電燈はゆふべの時雨に照りはへにけり
 山深み岩にいこひてキツ、キの木をついばむを我見てありし
 電燈の赤き光をたどりつゝ二千年前の戀のうたよむ
 理知に走る人は淋しいはゞいへそのさびしみぞ我が樂にこそ
 愛といふやさしき泉くみ得ずに荒野走りぬ我が死の旅は
 別府がよひの夜の汽船のあとの波青く光るな夜光虫さびし
 ひきしほの秋の海行けはガサ／＼と寄居蟲あまた逃げてゆきけり
 おそろしや地獄の釜の下に燃ゆる火のごと赤し夕ばえのそら
 秋はさびし秋はさびしと人いへど我は思はずこひ／＼てこし
 肺やむと秋のふけたる或朝に京の繪師より端書來りぬ
 秋の夜の雨ふる時は寝ねがてにひろげて讀みぬハイネの詩など
 我が友と秋の月夜に西洋の戀歌うたひぬ聲たからかに

○

世は静か 動もなく静もない
 死も生も 生存も
 世は静か 唯だ無 眞如
 元子の雨はまつすぐに降る
 まつすぐに降つて來る元子の雨
 静を亂す生成の聲
 宇宙は出來て來る そして滅ぶ
 元子の雨が横にふる
 横にふる元子の雨
 滅んだ宇宙も 静ではない
 雨は横にふるもの 元子の雨は

○

偶 語

碧い空。五月の淋しみは、ハイネばかりではあるまい。

白い雲。ゆつくりと飛ぶ。ゆつくりと、ゆつくりと、ゆつくりと。

どうしてヲレはゆつくり出来ない。なせ急ぐ。急ぐ道は死だよ！

『死の聲』ゆつくりの道も死だよ！

同じ死か。急いで、あがいて、早く死んで行く。

ヲレはそれか。それがヲレの藝術なんだろう。

~~~~~  
御茶を下さい。

出ますか？

出ないお茶はお湯と同じことですね！

私はお茶がのみたいんです。

いゝですく、お茶もお湯も同じ水ですもの。

~~~~~  
知るといふこと、信ずるといふこと。

客観の世界と、主観の世界。

それは永遠に交るなき平行線かしらん。

ヲレは客観と主観と、それが一つの矛盾概念でなく、その中に、更に大なるアルモノを包含し得る様な気がする。知と信との錯合。

310
502

大正十五年十二月十六日印刷
大正十五年十二月二十五日發行

(非賣品)

編輯者兼

京都府紀伊郡深草町福稻五五番地
高山昇

印刷人

京都市河原町通松原上ル富永町
三六四番地
横江重太郎

印刷所

横江印刷所

終